

## 小学校教育実習における現状と展望 (Ⅱ)

— アンケート調査を中心に —

福田 啓子, 中村 浩子

(平成 19 年 10 月 4 日受理)

## Teaching Practice of Elementary School, Today and Future

— Based on Students Report —

FUKUDA, Keiko and NAKAMURA, Hiroko

(Received on October 4, 2007)

キーワード：小学校教育実習、教員養成、実習指導

Key words: Teaching Practice, teacher training

### はじめに

本研究は、大学(教員養成校)における教育実習指導の充実した内容と方法を提示することを目的とし、その一環として、これまでに、学生のアンケート調査から、教育実習を通しての感想や思いを分析してきた<sup>1)</sup>。ここでは、学校、児童、教師、授業、進路についての様々な具体的内容が抽出されたが、全体的には、「子どもとの触れ合いを通して感動」し、「教育(者)への意欲が高まった」ことに集約された。短い期間の中で教職のすばらしさや大変さ、教育を取り巻く諸問題の実情に目を開き、教職に就く基礎的な一步を踏み出したものであること、また、実習体験は進路決定の重要な機会ともなりえるものであったことも明らかにした。これらの結果を基に、学生がより効果的で有意義な実習体験ができるような実習指導の今後の方向性を述べてきた。

今回は、前回のアンケート調査に引き続き、学生のより具体的な体験内容が記述されている実習後の報告書から、教師の仕事の中核である「授業」に焦点をあて、授業体験からの学生の意識や感想を内容分析することにより、本学での小学校実習指導の授業体制や形態(方法)について、今後の改善点や課題を追及していきたい。

本学、小学校実習指導においては、例年、実習終了後、実日誌習の他に、報告書、実態調査、アンケート、感想レポートを提出させる。ここ数年それらを分析検討

してきたが、そこには、実習前に行った事前調査に見られる予想・推測との違い、期待、不安の変化など様々な意識、感想、気づきを読み取ることができる。授業体験では、大半の学生は、授業を楽しいものとして捉え、苦痛さや嫌さ訴えた記述はごく少なかった。しかし、指導技術や指導内容については、困難さを感じ、問題意識も強いことがわかり、その解決に向けての対策が必要とされている。従って、まず、実習校での授業実施状況を把握し、その授業に対する学生の感想や思いをないう分析から検討し、問題の所在を明らかにしていきたい。

### I 研究方法

#### 1) 対象

本学児童学科児童教育専攻4年生、小学校教員免許状取得履修者 242名  
(平成17年度78名, 18年度80名, 19年度84名)

#### 2) 実習期間

平成17年度; 5月16日(月)~6月14日(火)  
平成18年度; 5月15日(月)~6月13日(火)  
平成19年度; 5月14日(月)~6月11日(火)

#### 3) 分析内容

小学校教育実習終了後の、実習報告書より、下記の内容分析を行った。

1 実習状況について

- ① 配属学年
- ② 実施授業教科と時間数
- ③ 研究授業内容

2 授業に対する感想について

実地授業および研究授業の感想からその内容を年度別項目別に分類した。

II 結果および考察

小学校教育実習(4週間)は、通常、観察期(第一週目)、参加期(第二、三週目)、研究期(第4週目)にわたって行われる。実地授業は、教育実習の集大成とも言える研究授業に向けての、授業体験を積むことであり、一日1単位時間程度の授業から前日授業へと全体を通して平均20単位時間の授業を体験する。ここでは、その実地授業と研究授業について、時間数や教科、授業内容における学生の感想を分析した結果について検討する。

1 配属学年について

実習校での配属学年やクラスについては、学校側の指示によるところがほとんどである。例年、中学年に集中され、図1の過去3年間の配属学年をみても、2年生(22.0%)、3年生(26.0%)、4年生(32.0%)とほぼ同数であり、約8割を占めている。1年生配属(1.0%)は、最も少なく、高学年では、5年生(12.0%)、6年生(5.0%)となっている。年度別にみると微妙な差はあるがほとんどその割合は変わっていない。

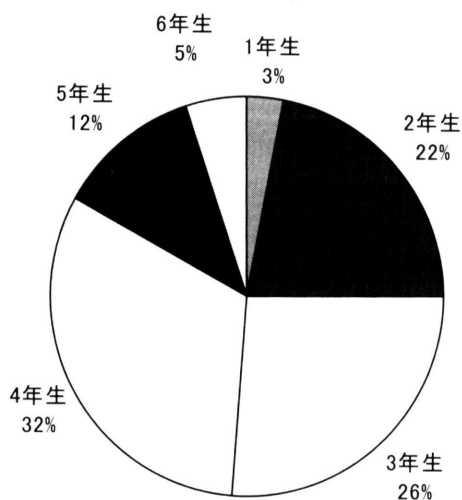


図1. 配属学年の割合

2 授業時間数と教科について

図2は、実習校での実地授業とその時間数を教科別、年度別に示したものである。ここでは、授業時間数や担当内容は、小学校事情などから個人差があるが、全年度共、圧倒的に国語、算数が多く、その他の教科等は少ない。両教科は、小学校における基礎教科であり、表2の「小学校年間授業教科時間数」(学習額指導要領)でも他教科に比べ多くなっていることから、学生が体験する授業回数も多くなるのは当然の結果であろう。しかしながら、年度別に見ていくとわずかながらも、算数科が減少し、社会科、理科、体育などが増加している。

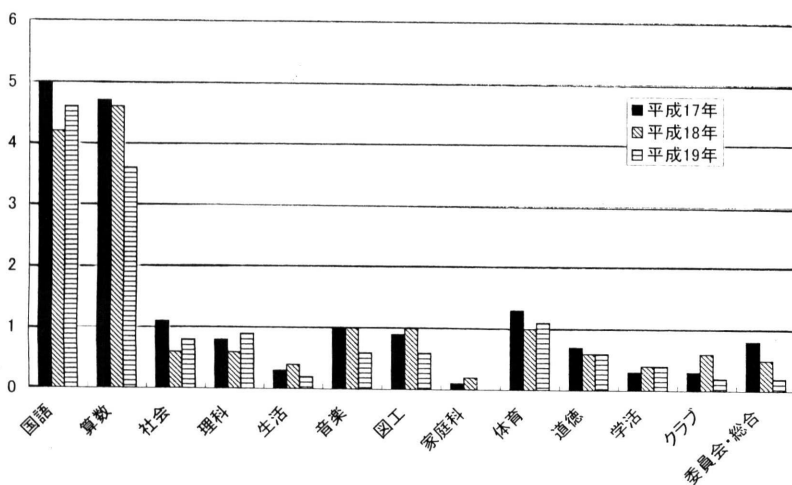


図2 実地授業教科と担当時間数

3 実地授業について

表2は、実地授業体験で感じたことを年度別、項目別に示したものである。まず、全期を通して最も多かったのが、a「教師の助言」(19.4%)であり、具体的な内容を見てみると、「毎時間指導案を見てくださり、授業へのアドバイスをいただいた」、「先生と計画を立てなが

表1. 小学校における年間授業数

区分	各教科の授業時数										道徳の授業時数	特別活動の授業時数	総合的な学習の授業時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	その他				
第1学年	272		114		102	68	68		90	34	34			782
第2学年	280		155		105	70	70		90	35	35			840
第3学年	235	70	150	70		60	60		90	35	35	105		910
第4学年	235	85	150	90		60	60		90	35	35	105		945
第5学年	180	90	150	95		50	50	60	90	35	35	110		945
第6学年	175	100	150	95		50	50	55	90	35	35	110		945

ら進めた」,「先生の言葉が励みになり,気持ちが落ちてきてできた」といった指導教諭の協力などである。次いでc「事前準備」(14.0%)で,実際の授業に向けて「指導案を立てながら教材を準備することを学んだ」,「発問など授業の展開を予想し準備する大切さを学んだ」など授業準備の大変さと大切さを実感している。また, g「失敗」(4.5%)の「焦ってしまい,板書を間違えたり説明が曖昧になったりした」などの内容もみられるものの, b「授業の楽しみ」(8.3%)やd「児童の協力」(8.7%)も比較的多くみられ,「回数を重ねるうちに楽しみながらできるようになった」,「子ども達の言葉がヒントや励みになった」など,教えることの楽しみや充実感も感じられる。h「自信」(1.2%)は,少数であるが「教えることに自信がもてるようになった」というのもその現れであろう。

授業内容についてみると, i「指導の難しさ」(8.3%) f「継続の実態」(3.3%)の「授業を行なうことの難しさを改めて感じた」,さらに, e「児童の実態」(4.1%)

の「子どもの実態をよく観察することの大切さを学んだ」などは,予想以上に現実の教えることの難しさや児童理解の重要性を痛感していることがわかる。

#### 4 研究授業について

ここでは,教育実習の集大成として行なう研究授業について,上述の実地授業結果と関連させながらみていく。研究授業教科の選択は,指導教官の指示や学生と相談しながら決定していく場合も多いが,半数以上は,学生の希望する教科で行われている。(図3参照)。

図4は,研究授業教科の割合を年度別に示したものである。ここでは,やはり主要2教科に集中され,特に算数科は最も多く,17年度では,約半数を占めている。他教科の割合は,図1とほぼ同様の傾向がみられる。年度別に見ると,各教科の担当に微妙な増減があり,算数科は減少傾向,そして,社会科,道徳が増加しているのは興味深い結果である。

表3は,研究授業の感想を分析した結果を示したものである。その内容は, k「反省会での助言」(24.3%), a「指導教員の助言」(21.1%)が多く,多くの教員に助けられたことがわかる。aでは研究授業の準備,特に指導案作りに関する記述が多く,「忙しい中,何度も指導案を見直していただき,その過程で発問の大切さや細案の書き方などたくさんのことを学ぶことができた」という記述に代表される。kの内容は,「反省会では,授業内容について厳しい言葉を言われ,必死に涙をこらえていたけど,とても勉強になった。できることならやり直したい」「全校の先生が授業を見に来てくださり,評価を書いていただいた」など授業終了後の,協議会や反省会等では,校長はじめ,多くの教諭からの様々な問題点の指摘や意見,指導や励まし,言葉かけを受けたことがわかる。i「児童の協力」(19.8%)では,「私の授業を楽しみにしてくれました。ピンチのときも子どもたち

表2. 実地授業の感想

実地授業	平成17年度	平成18年度	平成19年度	合計
a.指導教員の助言	12(16.4%)	19(25.6%)	16(28.5%)	47(27.0%)
b.授業の楽しみ	7(9.6%)	9(12.1%)	4(7.1%)	20(11.4%)
c.事前準備	10(13.7%)	11(14.8%)	12(21.4%)	34(19.5%)
d.児童の協力	9(12.3%)	6(8.1%)	6(10.7%)	21(12.0%)
e.児童の実態	4(5.4%)	2(2.7%)	4(7.1%)	10(5.7%)
f.継続の実態	3(4.1%)	2(2.7%)	3(5.3%)	8(4.5%)
g.失敗	5(6.9%)	5(6.7%)	1(1.7%)	11(6.3%)
h.自信	1(1.3%)	1(1.3%)	1(1.7%)	3(1.7%)
i.指導の難しさ	4(5.4%)	13(17.5%)	3(5.3%)	20(11.4%)

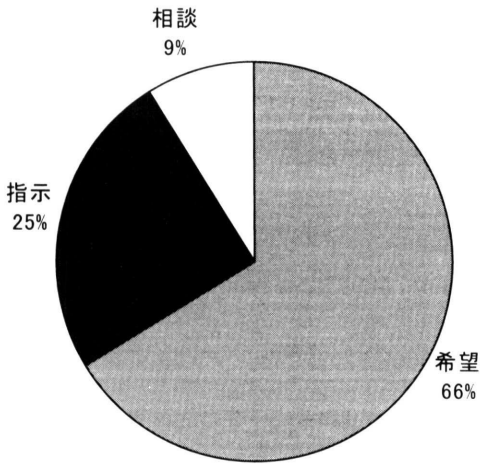


図3. 研究授業の選択方法

が助けってくれ、授業に協力してくれたのががんばれました」、「子ども達が積極的に参加をしてくれて進めやすかった」、などは、h「達成感があった」(2.9%)などとあわせ、実習も後半をすぎ、子どもたちとも親しみ、授業の進め方にも自信がついてきたものと思われる。

また、割合的には、低いのがd「失敗した」(3.7%)の「緊張した為、時間内に終えることが出来なかった」やf「指導の難しさ」(6.2%)、g「教材研究不足」(4.5%)では、反省的内容や改めて授業の大切さ、難しさを実感していたこともわかる。

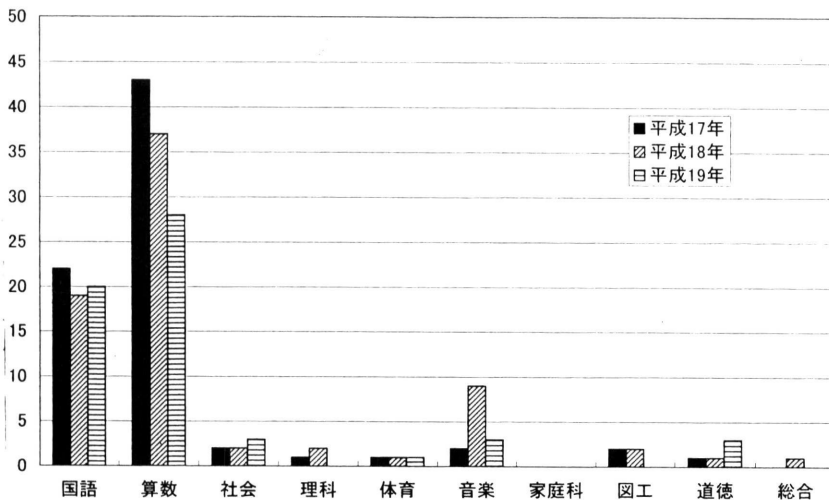


図4. 研究授業教科と担当時間数

これらの結果を個人別に分析してみると、研究授業前に指導教官とのコミュニケーションや関わりが多い学生、実地授業回数の多い学生ほど、研究授業への不安感や緊張は少なく、余裕を持っていたように思われる。

「授業を5回だけしかさせてもらえず、研究授業が不安だ」、「授業回数も少なく指導教員の先生とは、あまり話しをする時間がなく、どうしたらいいか迷ってしまった」、「指導案も授業も好きなようにやりなさいといわれ困った」などの感想を持った学生は、研究授業でも、失敗や反省部分が多い。同様に、学生の性格によることも多いが児童と積極的に遊んだり話をしたりしている学生の成功率も高いようだった。また、時間数や授業範囲は、指導教師から指示されるが、「ひとつの単元をずっと任せられたので、指導する全体が見えて、その中で研究授業をしたのでやりやすかった」、などの内容にみられるように1時間(45分)だけの授業ではなく、継続した授業(小単元)を経験している学生は、研究授業でも、より効果を発揮しやすかったことがわかる。

#### まとめ

以上、過去3年間の小学校教育実習における実地授業および研究授業について、学生の感想を実習終了後の報告書から分析してきた。

実習校の指導体制や指導方法によって授業内容にも個人差はみられるが、大部分の学生は、現実の子どもの前で行う授業(教師の中核となる仕事)の本質の厳しさや難しさを痛感すると共に可能性を知ることができたよう

に思われる。もちろん、緊張感や不安もあり、失敗もしたであろうし、満足のいくものではなかったかもしれない。しかし、失敗を乗り越えて、反省しながらも次への授業に向けて挑戦していく様子が、報告書の随所にみられ、授業を楽しいものと捉えていた様子が伺われる。そして、何より特記すべきことは、指導教官の指導や言動が学生に大きな影響を与えたという

ことである。授業の事前準備や教材研究、学習指導案の作成時など「先生の助言がなければできなかった」「指導担当の先生のような教師になりたい」「何度も励まされて、良い授業ができるように頑張った」などに代表されるように、上述でも述べたが、指導教官との関わりが多い学生ほど授業（研究授業）での満足感や達成感が高いことから頷ける結果であろう。

また、今日の教育現場は、児童の実態や社会情勢の変化に伴い、指導内容や指導も変わりつつある。学級経営における児童理解や新たな教育に対応すべき指導計画や指導技術のあり方が日々検討されている。実習生においても、「こどもたちは、明るく元気とてもかわいい」という反面「一人ひとりの子どもを知ることが難しい」「どうやって授業を進めていかわからなかった」など、困難さを感じていた学生も多くみられた。ちなみに、前回報告した学生のアンケート調査（16年度、17年度、18年度）による「授業を体験した感想」では、「児童理解の大切さ」、「教材研究の大切さ」が上位を占めていたが、19年度では、1位に「教材研究の大切さ」、次いで「授業の難しさ」となっている。

これらの結果を踏まえて、大学（教員養成校）における、教育実習指導も、より具体的・実践的なものとなるよう検討せねばならない。従来、教育実習指導は、事前、事後指導から行われ、実習の意識づけ、心構え等を中心

に、連絡や注意事項等の事務的なことにまで及んでいる。児童の具体的な捉え方、関わり方、観方などは、各教科の専門的知識と同様、教科教育法や関連科目の講義・演習に頼らざるを得ない部分も多くはある。しかし、実習指導においてもその一端を担うべき内容の検討は十分にあると考えられる。教科や専門科目との関連を考慮し、きめ細かい、より実践的な指導が課せられている。

学生が大学で学んだ知識や技術を教育実習で十分に発揮できるよう、そして実習体験での成果や期待が将来の教員としての基礎となっていくようサポートしていくことが望まれる。

註

- 1) 福田啓子、真田洋子「小学校教育実習における現と課題」2007年3月 東京家政大学研究紀要第47集

参考文献

- 1) 小松喬生・次山信男「教育実習を成功させよう」2003年3月 一ツ橋書店

表3. 小学校における年間授業数

研究授業	平成17年度	平成18年度	平成19年度	合計
a.指導教員の助言	17(23.2%)	16(21.6%)	18(32.1%)	51(21.7%)
b.継続した授業	0(0%)	0(0%)	4(7.1%)	4(1.7%)
c.多くの授業体験	4(5.4%)	1(1.3%)	6(10.7%)	11(4.6%)
d.失敗	5(6.8%)	1(1.3%)	3(5.3%)	9(3.8%)
e.時間の配分	2(2.7%)	6(8.1%)	3(5.3%)	11(4.6%)
f.指導の難しさ	5(6.8%)	7(9.4%)	3(5.3%)	15(6.3%)
g.教材研究不足	3(4.1%)	3(4.0%)	5(8.9%)	11(4.6%)
h.達成感	4(5.4%)	1(1.3%)	2(3.5%)	7(2.9%)
i.児童の協力	13(17.8%)	18(24.3%)	17(30.3%)	48(20.4%)
j.自信	2(2.7%)	1(1.3%)	2(3.5%)	5(2.1%)
k.反省会での助言	20(27.4%)	19(25.6%)	20(35.7%)	59(25.1%)
l.教員志望への気持ち	1(1.4%)	1(1.3%)	2(3.5%)	4(1.7%)

### Summary

This is a summary of the reports collected from our University students who recently participated in student teaching in elementary schools.

While each of the elementary schools have their own unique characteristics, the majority of our students came away from the student teaching experience understanding the difficulty of actually teaching a class, as well as seeing their future potential as elementary school teachers. The reports showed that the training our students receive in teaching is very important.

On today's educational front, society, education, and the way of training teachers is changing. At our university, we have to take these changes into consideration when training teachers. We must cooperate with other classes and teachers at our University as we train students to become teachers.